

自己発見・変革する学生たち

短大二年生のゼミ

山本 秀人

(日本福祉大学)



はじめに

「私たちは、『運動ぎらい・体育ぎらいをうみださないために』のテーマのもと、一人一人がいろいろな想いをもってゼミに取り組んできた。体育ぎらいであった人、また反対に体育が好きな人が集まり、子どもにとって体育はどうかあるべきことがよいのかを追求してきた。まず、自分たちの体験をもとに、どうして運動・体育がきらいになったか、すきになったのかについて話し合うことからゼミはスタートした。：(中略)：私たちは、一年間を通じて『み

んなができて、わかる』体育の意味がすこしではあるが理解できたと思う。(後略)」

これは、一九八九年度のゼミ生達が一年間のゼミ活動の集大成としてまとめた、「卒業研究論文集」のまえがきです。

私のゼミに所属している学生達は、「小さいころから運動がだいすきであり、もちろんこれまで受けてきた体育もだいすき」「スポーツや運動それ自体はすきだが、学校における体育はきらい」「とにかく、スポーツ・運動・体育はだいすき、体育という言葉自体嫌悪感をいだいてい

る」など、じつにバラエティにとんでいます。

運動や体育がきらい、これまでの体育を通じて「できる」という感動を味わったことがない学生達は、「運動神経がもともとないから仕方がない」「自分の努力が足りなかったから」という想いを持っています。

一年間のゼミ活動では、学生達にこれまで受けてきた体育を客観的にふりかえらせることによつて、「体育はできるだけでいいのか」を追求させながら、幼稚園や保育所、いわゆる就学前教育における体育の教育的意義と、そのための教材研究とその指導法について研究していきたいと考えています。

保育所においては、幼児期における体育の役割や、就学前期までに子どもたちにとどのような力を身につけさせなければならぬか、という議論なしに取り組まれてきているのが現状であり、指導にいたっては「ガンバレ」式が多いようです。

卒業後、幼稚園教諭や保育所保育になりたいと思つているゼミ生達は、科学的に物事をとらえる眼を多少なりともつけてもらいたいと考えています。

一年間という短い間で何をすべきか。いかに自主的に研究を進めさせるか。本をいかに読ませるか。論文の内容を

どこまで追求させるかなど、課題は今でも山積みです。

以上の課題を抱えながらも、一九八八年度以降、ようやく一年間の流れが固まりました。本論では一九八九年度のゼミの取り組みを報告します。

ゼミ選択にからむ悲喜こもこも

日本福祉大学女子短期大学部保育科で二年生に開講している「保育基礎研究」というゼミナールは、選択単位であり、履修しなくても卒業の資格（幼教・保育）関係に影響を及ぼさないシステムになっています。しかし、ゼミ登録オリエンテーションでの、履修したほうが良いという説明が影響してか、ほぼ全員がゼミに登録し、一ゼミ上限二〇名規模となります。

選択方法は、一年時の十二月に、開講されるゼミ（年度によつてゼミ数は変動しますが、おおよそ十二から一四の間。ちなみに学生数は一学年二四〇名前後です）のなかから、自分が入りたいと思う第一希望から第三希望までのゼミの順に、選択理由を書かせたものを学生に提出させます。希望票の提出以前には、開講される各ゼミの教員が書いた、ゼミ内容の資料の配付と選択方法についての全体オリ

—運動ぎらい・体育ぎらいをうみださないために—

内容・方法

「これまで私が受けてきた体育には、一つもいい思い出がありません。体育『できる』『できない』が明確で、悲しいことばかりが思いだされます。『できる』ようになることは確かに素晴らしいことだと思いますが、はたしてそれだけが体育なのでしょう。保育園時代に保母さんに言われた言葉は今でも忘れることはできません。『〇〇ちゃんはできるのよ、どうしてあなたはできないの』というものです。この言葉をきっかけに私は、体育ぎらいになったのではないかと思います。」

この文章を読んで、私と同じだと思う人は少なくないでしょう。運動ぎらい・体育ぎらいは、初めからそうだったのでしょか。決してそうではなく、きらいにさせられてきた過去があるのです。その原因として、体育そのものが主体主義や技能主義に傾注しすぎていることもあげられるでしょうし、上の文章を書いた学生のように、指導者の何気ない一言による場合もあります。

「〇〇ちゃんはできるのよ、どうしてあなたはできないの」という前に、なぜこの保育者はその子ができるようにするための、言葉かけなどの指導をしなかったのでしょうか。おそらく、指導しなかったのではなく、指導することができなかったのだと思います。つまり、現時点でできていないにしかすぎない子ども達を置きざりにしてしまうような、指導内容・方法しか持っておらず、それはこれまでのケイケンやカンに頼らざるをえないものだったと思います。

幼稚園・保育所において、体育を課業として展開していく場合、最も重要になってくるのは、子ども達の現時点での発達や興味・関心とかかわって、取り上げる教材の技能指導の内容・方法が系統的に整理されているかどうかなのです。

就学前教育における体育・スポーツへの関心が高まり、各方面において多様な取り組みが展開されていますが、試行錯誤の様相を呈しており、系統的な理論と実践の確立が今や急務となっています。

そこで、本研究においては子ども達に心の底から「あもしろい」「またやろう」と言わしめるような、幼児期の体育のあり方について共に考えていきたいと思えます。

以下の柱にそって進めています。

- 1 子どもの発達にとって運動の果たす役割
- 2 就学前教育における体育の教育的役割
- 3 教材研究
- 4 すべての子どもが「できて・わかり・楽しい」体育となるための指導方法とは前期は、文献学習と実践を並行的に取り組みます。

後期は、マット運動、跳び箱運動、ボール運動などの教材を取り上げ、運動ぎらい・体育ぎらいをうみださない指導のあり方を、実践を通じて考えていきます。

なお、最終的には、それらの取り組みをまとめ、「卒業研究」を作成します。

エンターションが一度行われます。私が学生達にむけて書いたゼミ案内を、示しておきます。第一希望が二〇名をこえたゼミは、担当教員が希望理由を読んだうえで、二〇名にしほります。そこでもれた学生は、第二あるいは第三希望のゼミで、また定員にみたないところに機械的にまわされていくのです。

第三希望までに入らなかった学生については、教務委員の教員が面接を行い、所属を決定していくシステムになっています。

二年生になり、実際にゼミ活動が展開されていくなかで、「希望にあわなかったから」「仲のいい友達と同じゼミに入れなかったから」などの理由で、ゼミを途中で放棄する学生が必ずでてきてしまうのも現状です。

この選択方法については見直しが行われ、一九九一年度開講からは、ゼミ希望票提出前に、各ゼミ別オリエンテーションの実施（実施については各ゼミ担当委員の判断）、第一希望者のみの提出（もれた学生については、教務委員が面接指導を行う）、の新たな試みが行われました。

非常勤教員が導入され、選択の幅が広がったことにより、一九九一年度のゼミ選択は、第二希望まででおさまりました。

ゼミの単位認定については、「卒業研究論文」を提出した学生に対し、出席状況を加味して評価することになっています。

五月の側転実技とレポート報告に力点

以上のような過程をへて、私のゼミに所属することになった学生達との、一年間の取り組みを報告します。前にも述べましたが、一九八八年度以降ほぼ同じ流れで取り組んでいます。一九九一年度もこの流れでいこうと考えています。

一九八九年度の「卒業研究論文集」のあとがきに、「春休みの課題のレポートを書くことによって自己を見つめ直し、五月の合宿では、自分以外の考えを聞くことによつて他者を認め、側転の取り組みでは『できる』『わかる』『指導する』の意味がやっとなるようになった。そして、前期で理論、後期で実践を行い、『わかつて指導する』ことの大変さとその重要性を感じる事ができた」と学生が書いているように、五月に四週にわたつて行う教師主導でのマット運動（側転）の実技と合宿でのレポート報告に力点をおき、その二つの取り組みによつて、一年間のゼミ活

動の方向を学生達につかんでももらいたいと考えています。
以下、七項目にわけて報告します。

(1) 春休みの課題

ゼミの選択が終了し、私のゼミに入ってくる予定のまだ一年生の学生達に、春休みの課題として二本のレポートをだすことにしています。ゼミはもちろんまだ始まっていませんが、二年時になってゼミをスタートさせるための重要な意味をこのレポートは持つこととなります。

春休みの課題として、学生たちに課すレポートの内容は、①「ゼミテーマに関係すると思う文献を自分で選び、選んだ理由、文献の内容、意見、感想をまとめる」、②「これまで受けてきた体育への想い（体育に関する自分史）」であり、四月の第一回目のゼミの時間に提出してもらいます。枚数制限はなしです。

①では、自分で文献を選ぶことかなりの苦痛を感じるようです。さらに、枚数制限なしですから、内容が問われるというプレッシャーを自分で勝手につくってしまうようです。

②では、幼・保から大学一年まで体育を受けてきての感想と、体育がすきなのかきらいなのかという自分の想いと、その理由は何であるのかについて作成してもらいます。

この二本のレポートについては、提出後コメントをつけて返却します。そして、返却時に五月に実施する合宿の時に、全員の前で報告してもらうというのを伝えておきます。

(2) ゼミの開始

四月になり、いよいよゼミが始まります。一年間のスケジュールは「表1」のとおりです。四月の第一回目のゼミの時点で決まっていること、つまり私がこれだけはやる让学生在宣言するのが、三週目から六週目にかけて行う、私が指導する「マッド運動」の側転の実技と五月に行う合宿です。それ以外の内容については後で述べる学習委員会が中心になって決めていくこととなります。

ゼミの具体的な活動を始める前に、ゼミの運営主体である学習委員会をつくることから始めます。まず、四人の学習委員を決めてもらいます。この四人と私で構成する学習委員会がゼミ運営の中心になります。週に一度集まり、ゼミの進め方やサブゼミ（五人で構成し、ゼミを進めていくうえで必要になる事前の学習を進めるグループ）の状況を話しあいます。この学習委員については、あくまでも立候補を追求します。

四人の学習委員とその中で互選する学習委員長が決まっ

表1 1989年度 保育基礎研究全体計画

週	月日	内 容	備 考
1	4/14	1年間のゼミの進め方、自己紹介、学習委員の選出など	レポート提出
2	4/21	1年間の基本内容確定(テキスト、サブゼミ、実技内容など)	
3	4/28	<ul style="list-style-type: none"> 「マット運動」(側転を中心に) 全員ができるまで行う 担当(山本) 	5月に1泊2日で合宿を行う
4	5/12		
5	5/19		
6	5/26		
7	6/ 2	<ul style="list-style-type: none"> 「マット運動」VTRの分析 	
8	6/ 9	<ul style="list-style-type: none"> 幼稚園実習 	
9	6/16		
10	6/23	<ul style="list-style-type: none"> サブゼミ報告 	
11	6/30	<ul style="list-style-type: none"> サブゼミ報告 	
12	7/ 7	<ul style="list-style-type: none"> サブゼミ報告 	
13	7/14	<ul style="list-style-type: none"> サブゼミ報告 	
※夏休み中に2泊3日 or 3泊4日の合宿を行う(テキスト)			
14	9/22	<ul style="list-style-type: none"> 後期実践の確認 	卒業論文の確認
15	9/29	<ul style="list-style-type: none"> 実践 	
16	10/ 6		
17	10/13		
18	10/20	<ul style="list-style-type: none"> 実践 	
19	10/27		11/3学祭
20	11/10		
21	11/17	<ul style="list-style-type: none"> 実践 	
22	11/24		目次の完成
23	12/ 1		論文執筆開始
24	12/ 8	<ul style="list-style-type: none"> 実践 	
25	12/15		
26	12/22		
			論文下書き完成

※ 保育基礎研究論文提出日 1990年1月末日

てから、ゼミ生全員に、後期にやってみたい実践をだしてもらいます。その意見を参考に、学習委員会の初仕事として、後期に実践する四つの教材を決め、その教材別に二〇名のゼミ生を五人ずつに振り分けた、サブゼミという四つのグループをつくります。サブゼミそれぞれには、学習委員が一人ずつ加わります。

一九八九年度は、「リズム運動」「跳び箱運動」「ボール運動」「伝承遊び」という教材をそれぞれのサブゼミが担当し、前期の最後の四週では一時間ずつ理論学習の報告を、後期では、四・五歳児を対象とした三時間分の指導案の作成とその指導をすることになりました。

正規のゼミの時間は、それぞれのサブゼミの報告の時間になりますので、必然的にゼミの時間までに、サブゼミ毎に学習の時間を持つ必要がでてきます。それは、学習委員が中心になって進めていき、その状況については、週に一度行う学習委員会で報告を聞き、必要におうじて私の方から指示をだします。

(3) マット運動（側転）の実技

第一、二週をかけてゼミの運営方法と一年間のスケジュールを決めた後、いよいよ四週にわたる、私が担当するマット運動の実技が始まります。

運動・体育ぎらいである学生たちにとって、ゼミで行おうとしているマット運動の側転は、とてつもなく高度な難しい技術であり、全員できるようになるわけがないというのが、始める前の学生達の率直な気持ちです。

なぜ、側転なのかについては、跳び箱運動の「腕立て開脚跳び越し」と同様、できない学生が多いこと。「できた」という感動が他の教材に比べ大きいこと。「できない」「できない」が誰の眼にも明確であること。技術指導の系統がわかりやすいこと、があげられます。

学生達は、自分自身まして幼児期の子どもたちにとっても、とてつもなく難しい技術であると捉えています。決してそうではなく、「できる」ようになる下地はすべての子どもが持つっており、子どもたちの興味・関心や発達に応じた適切な系統的な指導があれば、できるようになること。そのことを理解してもらうために、まずはこれまで何度チャレンジしても決してできるようにならなかった学生達に、できるようなるといふ事実を突きつけることによつて、実感してほしいと考えています。口でいくら説明しても、なかなか納得しない学生達なのです。

側転の取り組みは、サブゼミごとのグループ単位で取り組む、教え合いの時間も確保しながら行い、毎時間ミニレ

ポートを書いてもらいます。

体育だいきらいであり、当然のごとくこれまでの体育のなかで側転ができなかった高川という学生は、次のように書いています。

「こんなにも早く側転の形つぽくなると思っててもいませんでした。なんか嬉しかった。今までこんなに楽しくマットをしたことがなかった。形はまだまだきれいじゃないけど、でもなんとかできそうな気がしてきました」（二時間目）。

「ここまで自分自身できると思っていなかったのですが嬉し。教えかたしだいですがくかわるものだなと思いました。側転ができるようになったことがすごい自信になりました。はじめは側転ができるようになるかどうか不安だったが、今では側転を基本としたいいろいろなことをしてみたくなくなった。そして、自分の可能性をためしてみたい」（四時間目）。

また、側転がもともとできていた学生達は、

「自分ができて、それをできない人に伝えることが

できませんでした。」

「これまでの自分の側転よりきれいなものになりました」

「他の人を見てると、自分もここが悪いんだなとわかります」

「発達にそった技術指導の系統っていうのは大事なんですね」

「自分ができると、子どもに教えることの違いとその難しさを実感しました」

「誰でもができるようになる可能性をもっているんですね」

「みんなできるようにするっていいですね」

という感想を書いています。

できるようになるわけがないと思っていた学生達。しかしながら、幼児が取り組む内容で実際に行ってみると、たった四時間ほどでできるようになってしまうのです。学生達はこの事実によって、これまで受けてきた側転の指導は、はたして何だったのかという思いをいだき、「へたにさせられてきた過去」を問い直す契機になります。

また、側転がもともとできる、体育だいすきである学生

達は、できていくすじ道をまのあたりにし、「できてもらったことを他者に伝えられない自分」にもどかしさを感じはじめ、「自分さえできればそれでいいのか」という問いに直面するのです。

このできるようになっていくすじ道（技術指導の系統性）を全員で学び、そして全員の側転ができるようになることを出発点として、学生達には、これまで受けてきた体育の指導法を問い直しながら、子どもたちにとって「できて・わかり・楽しい」体育のありかたを追求していつてほしいと考えています。

(4) 合宿でのレポート報告

以上の側転の取り組みで、全員側転ができるようになってきたころをみはからい合宿をおこない、春休みに課したレポートを、全員の前で一人ずつ報告してもらいます。側転の取り組みによって、身体と心を解放し自分自身をさらけ出すことができたためか、自分の気持ちを素直に表現して報告してくれます。

側転の取り組みのミニレポートでも紹介した高川という学生は、これまで受けてきた体育の授業についてレポート報告をしたうえで、「これまでの体育の時間は、だいきらだった。その原因はいくら努力してもできるようになら

なかったことだと思えます。負けずぎらいという性格もあって、自分なりに練習はするのだけれど、うまくならないのです。今考えると、これまでの体育の先生は、きちんと指導してくれなかったのではないかと思えます。跳び箱では、跳べた子はすぐに教室に行けるけど、なかなか跳べない私達には、手を前につけと言うだけで、何度も繰り返しただけで時間は終わるのです。はたして、それが指導なのでしょうか。保育者になろうとしている今、子どもたちの視線にたった適切な指導というか、保育者の力量が問われるなど痛感しています。側転ができるようになった今、後期に予定されている跳び箱が楽しみになってきました。我慢じゃないけど一度も跳べたことはありません」とつけ加えています。

それぞれの体験をもとに、どうして運動・体育がきらなくなったのか、すきになったのかについての話し合いが合宿では活発に行われます。この討論で、自分以外の考えを聞くことによって他者を認め、「へた」にさせられてきた過去を見つめ、これまで受けてきた体育に対して疑問を感じはじめます。その疑問をすこしでも解決していくためには、体育は、ひいては幼児期の体育はどうあるべきなのかを追求していかなければなりません。そのスタートラ

インに、側転の取り組みと合宿での報告を契機に全員が立つことになるのです。

(5) サブゼミ毎による理論学習と報告

その後、「リズム運動」「跳び箱運動」「ボール運動」「伝承あそび」の教材別に別れたサブゼミ毎に、それぞれの教材の理論学習を進めてもらい、その成果をゼミの時間に一時間ずつかけて報告してもらいます。図書館での本の探し方を覚えることに始まり、報告の仕方をどうするかなど、サブゼミ単位で行ってもらいます。

報告の前に資料を一度見せてもらい、引用する場合文献を明記するなど、初歩的な手続きについて必要な助言を与えますが、基本的には内容が不十分であろうと、やり直しは求めません。ゼミの時間は、報告がうまくいこうが失敗しようが、極力口をはさまないようにしています。この報告がベースになって、後期の三時間分の実技指導案ができあがっていくのです。

「跳び箱運動」のサブゼミは、ほとんど本から抜き書きではありませんが、「幼児にとつての体育」に始まり、「器械運動の歴史」をひもとき、「跳び箱の特性」を調べて報告をしました。さらに、後期の実践の指導内容にも見通しを持たせたものでした。彼女達にとつては大変な苦労だっ

たようです。

(6) 三時間分の指導計画の立案とその指導

後期にはそれぞれの理論学習をペースにし、四・五歳児を対象にした三時間分の指導案を作成し、指導しあうのです。

「跳び箱運動」のサブゼミは、前期の理論学習をベースにした指導案を作成し、実際に指導していききました。

跳び箱運動には、「切り返し系」と「回転系」の二つがあることを調べたうえで、系統的には「回転系」の方が妥当であるという結論にいききました。しかしながら、保育現場では圧倒的に「切り返し系」である「腕立て開脚跳び越し」がとりあげられているという現状から、実践では一時間目に「切り返し系」の「腕立て開脚跳び越し」を、二時間目に「腕立閉脚跳び越し」、そして、三時間目には「回転系」の「台上前転」を取り上げることになりました。担当のサブゼミの予想では、スムーズにいくのではないかと思っていたようですが、一時間目の「腕立て開脚跳び越し」で早くもつまずき、全員跳べるようにはなりませんでした。二〇名のうち一〇人はもともと跳べませんが、その中の一人も跳べるようにはならなかったのです。

他のゼミからは、「指導の仕方に一貫性がない」「跳

べるようになるという見通しが持てない」「幼児の指導の仕方がわからない」などの意見が、一時間目の最後にもつた話しあいでもされました。事前に、実践の資料を見てもらったときには、「多分このとおりにうまくいかないだろう」という感想は伝えておきましたが、なぜ私がそう思うのかについては聞いてきませんでしたので、資料どおりにやってもらうことにしました。

聞いてきても、答えはしませんでしたが。

一時間目終了後のサブゼミでは、技術指導の流れがおかしいところを指摘し、残りの二時間分について、改めて指導案を作り直してくるように言いました。

二時間目は、一時間目ですまじいた「腕立て開脚跳び越しを」新しい流れで指導し直し、見事に全員跳べるようになったのです。

前に紹介した、高川という学生は、「側転もでき、そして今度は小学校以来の難問だった跳び箱を跳ぶことができた。目の前がさらに広がったようです」という感想を、二時間目の最後の話し合いの時に述べています。

三時間目は「台上前転」から「ネットクスプリング」までの系統を、実践しています。

この一時間目の失敗は、ゼミ全体にとってよい刺激とな

り、それ以降予定されているサブゼミの事前の取り組みは、十分な準備とサブゼミの予行練習を行うようになりました。以上述べてきました、前期後期の理論学習と後期の実技学習については、資料を作成する段階でサブゼミ毎に指導するようにし、ゼミの時間は進め方をすべて学生たちにまかせ、口をださないようにし、最後の話し合いのところで感想を言うようにしています。

(7) 卒業論文の作成

後期の実践の取り組みと平行して、卒業論文の作成にもとりかかります。学生達は、その合間をぬって就職試験にもものぞんでいくのです。

卒業論文は、一人でも共同で書いてもかまわぬこととしています。卒論指導としては、目次の作成までは注文をつけるようにしていますが、その後文章については提出まで目を通しません。そして、提出後に、自費で「卒業研究論文集」づくりをします。

高川という学生は、「体育授業からうみだされる『体育ぎらい』『運動ぎらい』というテーマで、なぜ『体育ぎらい』『運動ぎらい』がうみだされるかについて、体育に関するこれまでの自分史をまとめることによって考え、「早期能力開発』『能力主義』『勝利第一主義』というわが国

の状況に目をむけ、その原因を見つけたさうとしています。正直なところ、これらの内容は論文と言える代物ではありませんが、子どもの現状を見ると、社会状況との関係を見ることができないという点に気づいただけでも評価できると思います。

おわりに

一九八九年度の一年間のゼミ活動だけをふりかえっても、「側転の取り組みから、グループ学習で行わせたほうがいいのでは」「後期の実践の取り組みでは、全員が主体的に取り組んでいたか、学習委員まかせになってはいなかったか」「できるようになったという感動だけで終わってはいないか、教材研究や指導法については不十分ではなかったか」そして「卒業論文の内容のよさ」など、いくつかの課題がうかがわれています。

卒業し、幼稚園や保育所に就職していく学生達。この学生達が、ゼミの取り組みだけで、幼児期の体育の指導について自信をもって取り組めるようになったとは思っていません。

しかしながら、子どもたちの視線で物事を考えることや、物事を科学的に捉えることの重要性がわかる芽は、まだ小さいですが育ちははじめたのではないかと思っています。

そして、子どもの発達を見つめるときには、その子だけを見るのではなく、その子を取り巻く社会全体を見ることの重要性も感じてくれたと思っています。

以上、一時間のゼミの流れを報告してきました。前にも述べましたが、五月に行うマツト運動の側転の実技とゼミ合宿の正否が、一年間のゼミ活動をかなりの部分左右するといえるようです。私も一九八八年度以降、そこにかんがりの力点をおいています。

最後に、本学短大の問題点をあげて、おわりにしたいと思います。

「となりのゼミはどんな内容で行っているのか」について、ほとんど知らないのが現状であり、私のゼミがこのような内容でやっていることを、この報告を目にしてはじめて知るのではないでしょう。

この閉鎖性を打ち破っていくためにも、ゼミ活動を通じてどのような力を学生達につけさせていくのかという基本的なおさえを、今一度集団的に検討し、教師集団の共通理解をはかることが、まずやらなくてはならないことだと思います。

そのためには、それぞれの教員がそれぞれの教育実践を、さまざまな所で公にしていくことの必要性を強く感じています。

ます。そのうえで、(1)ゼミ選択方法の見直し、(2)卒業論文発表会の実現、(3)一年後期からの保育基礎研究の実施、(4)必修化、(5)ゼミ間の交流(教員同士のゼミ指導内容の日常的な交流も含め)、などの課題を検討していく必要があるのではないのでしょうか。そのような感じているのは、私だけではないと思っています。

へこの実践報告は、愛知県私立大学教職員組合連合発行の『教育研究』(Vol.17・一九九〇年二月二五日)に掲載したものに、加筆修正したものです。ゝ

